

# 論文購読で自身の論文のテーマ探しの第一歩を。 討論では「ファシリテーター」に徹する

2018年度春学期ティーチングアワード受賞

対象科目：文法論

最新の論文を批判的に読む方法を学んでもらうことを目的としたこの授業では、論文発表と討議を1セットとして、学生たち自身を主体とした学びの場を提供している。国籍や経歴がさまざまな学生たちの顔ぶれやその場の様子を見ながら、状況に応じてグループを分割するなど柔軟に対応する前田講師の手法が、「教員と学生と一緒に深く掘り下げることができた」と学生たちからの高評価を得た。

国籍も経歴も多様な学生たちを指導し、  
「共生」社会を目指す

今回受賞対象となった大学院日本語教育研究科の2018年度春学期設置科目「文法論」は、修士課程1年生以上が履修する選択科目である。学生の人数は年によって異なるが、例年10名程度のことが多く、留学生が多いことが特徴だ。2018年度春学期には7名が履修し、そのうちの5名が中国からの留学生であった。また、一度社会人経験を経ている、大学のときには別の学問を専攻していたりと、さまざまなバックグラウンドを持つ学生がいる。日本語教育研究科の大きな目標として、日本語のネイティブと、それ以外の多様な人たちが一緒に社会を作っていく『共生』のために、役に立つ人材を育てようというものがある。

この講義の目的として前田講師が考えていることは主に2つある。1つ目は、学生たちは修士論文を書くことになるので、そのテーマ探しに繋がることを見つけてもらいたいということ。2つ目は、学生たちのバックグラウンドが異なるという事情もあり、論文をしっかりと読んだことがない学生もいるため、「最新の論文を批判的に読む」とはどういうことかを実践的に学んでもらいたいということである。



前田直子

早稲田大学非常勤講師

授業は日本語で行い、教科書に江田すみれ・堀恵子（編）『習ったはずなのに使えない文法』（くろしお出版、2017年発行）を使用した。

論文の発表と要約を通して、  
常に疑問点を探す練習を積ませる

前田講師の講義は学生の発表（プレゼンテーション）が中心となって進められる。初回のオリエンテーションで、講義の目的と概要を説明し、2回目の講義で、だれがいつどの章（論文）を担当するか、というように発表者を決める。どの章を担当するかは、本人の希望を考慮して決めることが多いという。論文を読むのは論文購読と討議が1セットの形になっている。論文購読の回では、担当者が発表をして、発表者以外は宿題として論文要約をしてくる。次の週に討議という形で質疑応答を行う。発表の進行方法はこうだ。発表者はパワーポイントで資料を作成し、事前に前田講師宛てにメールで送付する。発表者以外は論文要約及び疑問点を最低3点、A4で1枚程度にまとめ、2枚印刷し

て当日持参。1枚を前田講師に渡し、1枚を発表の際に疑問点やメモを書き留めるために使う。90分の講義のうち、40分程度で発表者が発表し、その後質疑応答を行う。

質疑応答では、考えてきた疑問点などを発言してもらおうのだが、積極的に発言する傾向がある留学生が多いこともあり、活発に討議が行われるそうだ。簡単には解消しない疑問点もあるが、それはそれでよい気づきになる、と前田講師は考えている。「疑問点を出すというのは実はとても難しいんです。立派な先生が書いたものだから『その通りです』と読んでしまうんですが、そうすると研究のネタを探せなくなるので、どんな小さなことでも疑問点を見つけてもらうようにしています」。

成績評価の方法は、レポート25%、平常評価50%、その他25%となっているが、割合が高い平常評価の内訳は、プレゼンテーション25%、授業への積極的な参加・貢献が25%となっている。論文要約の課題をしっかりと行っておけば、期末レポート課題の際にまとめて提出すればよいため、期末に慌てる必要はない。授業ごとの要約課題はメールで提出させ、前田講師からもポジティブなフィードバックを返すように心がけているそうだ。

### **「自分たちの学びは 自分たちでコントロールする」姿勢を養う**

このように、この講義では発表と討議が中心となるが、前田講師が常に心掛けているのが「ファシリテーター」に徹する、ということだ。「人数も少ないので、まったく発言できずに終わる学生がいないように、必ず全員が1日1回は発言するように気を配っています。でも、だれかが質問して発表者が答えられないときなどは、私が答えを言わないようにしています。いい質問だったらだれかに振っていく。そうすると必ずだれかが答えを言いますから」。

前田講師自身の学生時代の体験も、そのような方針に影響を与えているかもしれない、と講師は語る。「学生のときある授業で、お説教のように話す先生がいたので、友だちと相談して、発表者と質問者がずっと話し続けていたことがあります。学生たちも、将来自分が先生になったときのことを考えながら講義を受けてくれるとうれしいですね」。

また、毎年初回に学生たちの顔ぶれを見て、留学生が多い場合は討論の時間を増やしたり、場合に応じてグループに分割したりという工夫を取り入れているそうだ。例えば、7人を4人と3人に分けて10分間話し合ってもらい、それぞれのチームの意見を出す、というようなこともよくあるそうだ。自分たちの学びを自分たちでコントロールする姿勢を持ってもらう、そのために、柔軟に対処しつつ、ファシリテーターとして場を提供することに徹するというのが、前田講師の基本姿勢なのだ。

学生授業アンケートの「教員は効果的に学生の参加（質問や発言など）を促した」という設問に対して6点満点中5.9点と高い評価が得られ、また、自由記述のコメントに「一つの疑問点に対し、教員と学生と一緒に深く掘り下げることができ、かつ教員から毎回適切なフィードバックを得られている」という意見があったことから、前田講師の基本姿勢と熱意が学生たちにしっかりと届いていたことが伺える。「彼らの読みの中に、私自身が気づかなかった内容を見出すこともたびたびありました。学生にとっても教員にとっても、学びの多い刺激的な授業でした」。